

---

# グッドフレンド

カツオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グッドフレンド

### 【Nコード】

N0980A

### 【作者名】

カツオ

### 【あらすじ】

あんなにいろんな体験をしたあの時代は絶対忘れないと思う。こんな思い出を作ってくれたあいつに感謝をしたい。そんなオレの中学3年生の体験話を聞いて下さい。

## プロローグ（前書き）

こんにちは。カツオです。これは、12歳の時に書いた話です。  
カツオもいつかこんな体験したいと思っています。

## プロローグ

オレの宝物は宝石でも卒業アルバムでもない。

中学3年生だ。あんなに多くの体験をしたのは初めてだったような気がする。

「大島さん。感動した話ってありますか？」

運悪く残業になってしまった後輩が、同じく運悪く残業になってしまったオレに言った。

「なんで？」

オレもそんな理由もなしに話すぐらいのお人好しではないので、理由を聞いてみる。

「なんかDeep Love以来で感動したことないんです。あるなら話して下さい」

なんとなく納得したので、話してみた。

「今から話す事は、みんな本当の話ですからね……………」

オレがしばらく話した。それは、中学3年生の話だった。

オレが話していくうちに、後輩がポケットからハンカチを出して、ぼろぼろと涙を流しながら口を手で押さえていた。

「よし、話はここまでだ。仕事に励んでくれ」

「私、トイレにいきます！」

後輩がトイレに走って、入った直後に泣いている音いや、声がした。

オレが体験した出来事は、こんなに人々を感動できるのかとオレは思う。

確かにあのときはオレも泣いたが、関係ない人でも、あんなに涙を流せるとは思ってなかった。

それにしても、長くないか。

それにしても、あいつは今、何してるのか、今でも何回かそう思う。

オレはあいつに感謝している。

あんなオレでもこんな人生に歩んでくれた。

もし、目の前に現れたら、何回頭を下げるだろうか。

オレは書類を保存して、インターネットをつなげた。

そして、感動する話募集中とか言うサイトにさっきの話を打ち込んだら、すぐ感動した。とかいう感想が何通も来た。

まあ、こんなものかと思って、机の引き出しを開けて、紙を出した。

「good friend!」

と書いてある。

オレはそれを見ると、涙が流れて流れてたまらない。

オレは、あいつに会えて本当によかった。

さて、オレの話はすごく長くなるかもしれない。けど、よろしくお願いします。

## 転校生

オレは中学2年生の時、ある4人組と仲良くなった。

その4人は、桐島、新井、栗田、榎本だ。

この4人は最悪の不良で、生徒指導の先生もやれやれと言っている。中学3年生になってからは、あいつらと仲良くなってオレはどうしたかったのだろうと思っていた。

しかも、オレも不良扱いにされていた。

前、好きな子に告白したら、

「怖いからやだ」

と言われた。

あのときはオレも泣きそうでさ、机をダンダン叩いてさ。

もうあいつらのせいでオレの青春が終わったなんてと思うと、すげーやだった。

こんなことがあってから、オレはあいつらと距離を空けたが、また縮めてくる。

オレは今の自分に後悔している。なぜ、あんな奴らと友達になっただろう。

あいつらは毎日遅刻してくる。

平均的に3時限目ぐらいだ。それまでは、オレは普通の人として見てくれる。だが、あいつらが来ると、オレは不良となる。

その境界線はオレはものすごく嫌だった。

「あの不良五人組、いつもうるさいよね」

「高校受かないよ絶対」

とひそひそ話をしている。それも嫌だった。

当の不良たちは、

「言わせるだけ言わせりやええがな」

とか言っている。

あいつら、幸せだな。絶対。

ある日、オレは先生に呼ばれた。

聞いてみると、

「おまえの内申点は不良たちとは多いが、第一希望の高校は無理だ  
と思え。わかったな」

って言われた。あいつらというせいで、オレは高校も落ちそう  
だ。

「くそっ！」

オレは廊下の壁を蹴った。小さく響いた。

後輩がオレにびびって逃げてゆく。

ふっ、オレが不良に見えたのだらう。好きに不良にしてくれや。

オレはそう思って、膝をついた。

人はこの人の周りの状況だけで、人の性格を判断する。外れて  
も、当たってる確信する。

そして、人を落としてゆく。

一人で歩いて帰ってみた。

うざったい4人組がいないと、なんて気が楽なんだろうか。

翌日、いつもの通り、玄関で立ち止まる。

だが、一回頷くと、玄関のドアを開ける。

これはごくせんのヤンクミがファイトーオーとやってるのとまあ同  
じものだ。もう日課なのだ。

今日はクラスみんなが違うテンションだ。

不良はいない。

ただいま、オレは普通の中学2年生だ。

「どうしたん？」

普通のオレが近くの人に話しかける。

「転校生が来るんだよ。面食いの太田が一目惚れするほどかっこい  
いんだって」

クラスメイトは普通のオレとして話してくれた。

不良のオレだと、

「金は持ってないよ」

とか言う。

ところで、面食いの太田は、

「これは、私の運命よ。私の運命」

とか言っている。

オレも前、ナンパされている太田を助けたところ、2日後、告白された。

オレは自画自賛はしたくないが、多分ジャニーズ顔だろう。キーン、コーン、カーン、コーンとチャイムが鳴った。

先生が教室のドアを開けると、それを合図に全員が席についた。

「今日も不良は遅刻か。まあいいよな」

出席簿を教卓の上に置いて重い荷物を降ろした感じの笑顔になった。

オレは思ったがあいつらは出席確認以外は全ての先生に不良と呼ばれてる。

「別に名前で呼ばれたくねえ」

とかあいつらは言ってるが、裏では気にしてるかもしれない。

「ところで、今日は転校生が来た」

待つてましたかのようにクラスが騒ぎ始める。

「福原、入れ」

太田がとてつもない笑顔になってゆく。

教室のドアが開く。

教室に入ってきたのは目と鼻が成り立ってて、背が高く痩せてるイケメンだった。

「福原徹です。よろしくお願いします」

福原はふかぶかとお辞儀をした。太田はおっとりしている。

チャイムが鳴った。太田が福原に質問できなくて残念がっている。「それじゃ、朝のホームルームは終わりだ。福原に質問したければ休み時間にしろ。あっそうだ。福原は奥山の隣だ」

そう言って先生は教室から出て行った。あっ、俺の名前は奥山まことです。



福原はオレの隣にいそいそと座った。イケメンなのにすごく緊張するそう。オレはなんかかわいそうだから話しかけた。

「大丈夫、オレのクラスメートは全員いいやつだから。オレの名前は奥山まこと。よろしくな」

「そうなん、よろしく。僕は福原。てかさっき言ったよね」

「そうだったな。よろしくな」

なんだいなんだい。緊張してると思ったら意外と面白い話すじゃんか。

オレが思っていると、いつのまにか女子の人ばかりが出てきて、内心ビビった。

まあいいや。女子と福原の会話でも聞いてやろうじゃないか。

「福原君の家ってどこ？」

「さくら商店街とメチャ旨コロツケの池田の間だよ」

おっ、オレの向かいじゃん。

どつりで引つ越し屋とコロツケの池田がワーワー言ってたな。

「福原君の兄弟って何人？」

「企業秘密にしてもいい？」

企業秘密かよっ！！しかも女子しらけてるよ。

「こついつ芸風なんだ。面白いね」

どこがだよ。

「企業秘密にしてもいい？」

意味わかんねえよ！！しかも太田がおつとりしてるし。

「かつこいいい…」

太田が呟いてます。

すげーな福原は、って思いながら聞いていると、中学校ではありえないバイク音。

あいつらだ。光輝くハーレー部隊に学校に送ってもらった不良のあいつらだ。

「うーす、どうも」

ハーレー部隊のリーダーらしい人が清掃のおばちゃんに言って

る間にあいつらは校舎に潜入した。

オレはその情景をまじまじと見つめながら、後ろでは不良になつてゐるオレに対する視線が気になった。

しかもそんな情景は生徒指導が許すはずもない。急いで階段を駆け降りる音が聞こえた。

生徒指導はまず、あいつらを外に出した。

窓を閉めてるから聞こえないのでオレは窓を開けた。

「何やつてるんだ！！？」

「遅刻したから送ってもらつたんだ！！悪いかよ！！」

「送ってもらう場合は学校に連絡！！あとハーレーなんかを送ってもらうな！！」

「じゃあ、スピーカー内蔵の車に来てほしいんですか」

「ふつうの車だ！！」

「ふざけるな」

ハーレー部隊のリーダーが生徒指導に膝げりをした。

生徒指導の先生が後頭部を押さえてのたうち回つてゐるのを、ハーレー部隊とあいつらが笑つていた。

オレはとてつもなくやばいことに気づいてカーテンを閉めようとしたが、目が合つてしまった。

「奥山！！」

あいつらもハーレー部隊もクラスのみんなもオレをみた。もちろん、福原もだ。

福原はキョトンとしている。

「奥山！！あそこのパチンコ屋に新しいパチスロが入ったからやろうぜ！！こんな場所、サボろうぜ」

あいつらの辞書には受験と言う単語がないのでしょうか？

「行こうぜ！！ハーレーに乗せてやるから」

すると、ハーレー部隊のリーダーがオレを窓から引きずり出して、ハーレーに乗せた。

桐島がヘルメットを被つて、

「レッツアッー!!」

と叫ぶと、ものすごいスピードで校門から出ていった。  
本当にこれでもいいのか。

福原にとっては、最悪の転入生デビューとなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0980a/>

---

グッドフレンド

2010年10月12日06時25分発行